2. 非鉄金属企業の日常
－ペルー共和国リマ市／ワンサラ鉱山での日常生活について－

Compania Minera Santa Luisa S.A.　村上 龍介

1. リマの気候

「夏のリマは最高」とは、駐在員の間でよく聞く話である。燦々と照りつける太陽、青く澄み切った空、日陰に入れば適度に涼しく、食べ物は美味しい。間違いなく、海外駐在するなら最高の場所である（筆者はペルー以外駐在したことはないが）。

「冬のリマは最低」とも、つい口にしてしまう話である。毎日どんよりと曇った空、ジメジメと湿った空気、身体の芯から感じる寒さ、食べ物も美味しく感じられない。あまり駐在先としてお勧めできない場所である。

長く駐在していると忘れがちだが、リマの気候はなかなか不思議である。冒頭に書いた通り夏と冬の変化が激しい。しかも夏も冬もパタリと切り替わるように訪れる。ある日、朝起きてカーテンを開けると澄み切った青空が広がっている。その瞬間から「夏」である。また次の日に起きると空がどんよりと雲に覆われている。その日はまた一日「冬」である。スペイン語にも「春」「秋」という単語はあるのだが、リマに住んでいるとピンとこないのが正直なところである。

夏の海岸沿いの公園
休日には公園の芝生に寝転がって日差しを浴びる市民を多く見かける。

もう一つ、リマは一年を通じてほとんど雨が降らない。台風も来ないし、もちろん雪もない。ついでに花粉症もない（これは天気ではないが）。地球の裏側だから当然と言えば当然かも知れないが、四季折々、多種多様な天気のある日本とはずいぶん違うものだと思う。

2. リマの街

ペルーと言えばマチュピチュやナスカの地上絵など古代文明のイメージが強く、首都リマについて日本で知られているとは言い難い。テレビに映るのは地方ばかりのため生活レベルが低いと誤解されがちだが、実際に住んでみるとなかなか都会である。

筆者が初めてリマの地を踏んだのは 2005 年、かれこれ 17 年前のことだが、その頃から既に都会であった。マクドナルドやケンタッキーといった大手ファーストフードは当然のように進出していたし、スターバックスが中南米で最も早く進出したのはリマである（隣国チリより１週間だけ早い）。さらにその後も急速に経済発展を遂げており、市内には大規模な

2023 年 1 月 3 日の携帯電話画面
まだ日本では普及しているとは言い難い 5G。
リマでは普通に 5G の電波を拾えるようだ。

ショッピングモールが複数建設され、ZARA や H&M といったファストファッションなら当たり前のように手に入る。クレジットカードのタッチ決済はほぼ 100%普及しており、メルカド（市場）や街角の売り子さんに対してさえ QR コード決済が可能である。

私ごとながら筆者は九州のド田舎出身。徒歩数分でスタバがあり、コンビニがあり、大規模なショッピングモールにも歩いて行けるリマの生活はとても快適である。たまに郷里の母が「大変な生活をしている」と心配してくれるが、夜の８時以降は開いている店すらなく、どこに行くにも車が必要な郷里とくらべるとずっと暮らしやすいと常々思っている。

もちろん言葉が通じない、治安が良いとは言えない、渋滞が酷い等々、不便はある。しかしそうは言っても、リマは十分に都会で、それなりに楽しく暮らしていける街ではないかと思う毎日だ。

3. リマの食

リマの食事は美味しい。住んでいるので贔屓目に見てしまいがちだが、「南米レストランベスト 50」等のランキングでもだいたい１位をリマのレストランが獲得し、さらに 50 のうち 10 くらいをリマが占めているところを見ると、それなりに客観性がある話だろう。

美味しさの理由はいくらでも思いつく。一つは食材が多種多様なこと。ジャガイモやトマト、唐辛子、カボチャ等は原産地なだけあって品種が多く味も形も様々。それに大根や白菜、はては里芋や長ネギまで、移民が持ち込んで定着した野菜が多数ある。加えて漁業が盛んで海産物は何でもあり、鶏肉・豚肉・牛肉の宗教的な制限もない。食材の豊かさは美味しさに直結しているだろう。

家庭で出される普通のロモサルタード
ホカホカの白ご飯と食べるのもアジア的。できればツユダクでどんぶりにしていただきたい。

それに多種多様な人口構成も理由の一つだ。ペルー国民はインディヘナ（先住民系）とメスティソ（白人と先住民の混血）、日系や中華系、アフリカ系など様々なルーツを持つ人々で構成され、それぞれが独自の食文化を持っている。それに加えて、それらが混じり合って「フュージョン」と呼ばれる新たな食文化が生まれている。

「ロモサルタード」という料理がある。ペルーにおける家庭料理の代表格だが、ポテト

フライとタマネギ、トマト、そして短冊状に切った牛肉を一緒に炒めて作る。この料理、実は調味料に醤油を使っている。元は 19 世紀に中華系移民が作り出した料理らしいのだが、今となってはペルーにおいて子供が好きな料理第一位だ。家庭料理に当たり前のように醤油が使われていることは、ペルーの食文化がとても豊かであることの一端を示していると思う。

4. ワンサラ鉱山での生活について

筆者が所属するサンタルイサ社（Compania Minera Santa Luisa S.A.）は、リマから車で約６時間の位置にあるアンデス山中でワンサラ鉱山を操業している。

鉱山の標高はだいたい海抜 4,000m、富士山より高い。空気は薄く、酸素濃度は海抜 0m の６割強にしかならない。大気圧も低く、水は 90 度弱で沸騰する。現在はコロナ対策の関係で駐在員が現場に常駐している訳ではないが、多くの技術系社員は赴任期間の約半分をこの高地で過ごすことになる。

ここまでリマの生活を快適だ、食べ物が美味しいと散々書いてきたが、この鉱山生活は快適とは言い難い。空気の薄さはいかんともしがたく、コロナ禍でお世話になった人もいるだろうパルスオキシメーター（血中酸素濃度計）を使うと軽く坂道を上がっただけで数値が 90 を割ってしまう（コロナ患者なら救急車レベル！）。眠りも浅く、夜中に目覚めてしまうことも珍しくない。個人差も大きいが、どんなに慣れてもやっぱり大変、というのが標高 4,000m の世界である。

これはワンサラ鉱山に限らず、もっと言えばペルーにも限らず世界中の鉱山に共通するが、宿舎はドライ、飲酒禁止だ。そのため軽く一杯あおって寝る、ということもできない（高地での飲酒は悪酔いしそうだが）。インターネットの速度向上でずいぶん改善されつつあるが、どうしても鉱山にいる間は仕事以外にやることがない、という生活になってしまう。

2023 年 1 月 5 日のワンサラメシ
ワンサラの章だけ「メシ」と片仮名にしているのは NHK へのアピールである。

「いまの山のメシは美味いか？」現役も、OB も、ワンサラ駐在経験のある人間と会うと必ず盛り上がる話題である。山における唯一の楽しみはメシ、だけどこれが難しいのだ。高地では沸点が低いのでお米の炊き具合がよくなく、味の沁みも浅い。食材もリマから一週間分をまとめて運ぶので鮮度が落ちるし、種類も少ない。料理人にとっても高地は大変な悪条件であり、なかなか美味いメシにはありつけない。

コロナ禍前はたまに来客があると、どんなメシが出るかとても気になっていた。その日に

限って当たりで、「ワンサラのメシって美味いですね」と言われると、普段の苦労が軽んじられているようでちょっとモヤモヤした。しかし逆に、その日に限ってとんでもなく不味いメシが出たりすると、それはそれですごく恥ずかしかった。「お母さんやめてよ！」の気分である。

ちなみに現在、駐在員の間でいまのワンサラのメシは近年稀にみるほど美味いと評判である。きっとこれを読んでいる方がワンサラに来ても美味いメシが出てくるに違いない。地球の裏側ではあるが、是非、試食しに来て欲しいものである。

5. サンタルイサ社の紹介

最後に、筆者が所属するサンタルイサ社について紹介したい。サンタルイサ社は三井金属が権益ベースで 81.7%、議決権ベースで 100%の権益を保有し、ペルーで２つの鉱山を操業する現地法人である。現在、日本から派遣された駐在員 10 名を含む従業員 330 名が所属し、リマの商業地区であるサインイシドロに本社を置く。また、同じ本社には新たな鉱山を探す探鉱専門の組織である三井金属鉱業（株）ペルー支社（駐在員１名を含む従業員８名）が同居している。

鉱石から不純物を除去する選鉱工程で操業状況を確認するスタッフ

鉱石を運ぶための重機とその前でポーズをとるオペレーター

サンタルイサ社は 1964 年、東京オリンピックと同じ年に設立され、1968 年にワンサラ鉱山を開山した。ワンサラ鉱山の調査開始時は満足な道路すらなく、リマから四輪駆動車と馬を使って２日かけて現地入りしたと聞く。また鉱山の建設に際しても物資輸送が大きな障壁となり、自ら道路等インフラを整備しながらの開発であった。さらに開山後も、ペルーにおける軍事政権の台頭と国有化政策、ハイパーインフレによる国家経済破綻、極左ゲリラの活動とテロリズムの蔓延、社会争議の激化と、様々な問題に悩まされつつ、その都度、日本からの駐在員、現地ペルー人社員の努力でなんとか克服し、操業を継続してきた。2006 年にはパルカ鉱山を開山し、これまで 54 年間の長きに亘って日本へ非鉄金属資源を供給し続けている。

環境モニタリングのための採水風景

鉱山業は周辺環境や地域コミュニティに与える影響が一般に大きい事業である。また、ペルーにおいては特に鉱山業に期待されている社会的責任が大きい。サンタルイサ社は長きにわたってインフラの建設、教育や医療の無償提供、地域産業活性化策などにより地元を支援し、また同時に地元からは労働力の提供を受け、共存共栄を果たしてきた。ペルーに根付き、地元に根付き、長く操業を継続していることは、グローカル企業の一つの成功例ではないかと自負している。

昨今、鉱山業には地球温暖化やエネルギー問題など、ローカルだけにとどまらない社会的責任が求められつつある。また同様に、2022 年５月に親会社である三井金属鉱業（株）は企業としての存在意義として「探索精神と多様な技術の融合で、地球を笑顔にする。」というパーパスを定めている。これらが求めることは同じであり、我々が事業を継続していくためには、ローカルだけにとどまらず、より広く社会的責任を果たしていく必要がある。

グローバルに働く三井金属の社員として、同時にローカルに活動するサンタルイサ社の社員として、長期的かつ広い視野で、このペルーにて鉱山事業を継続していければと考える次第だ。

以上